

【佳作】

夜のピクニック

矢野 七夏（大阪府 樟蔭中学校 3年生）

「みんな、夜歩く。ただそれだけのことがどうしてこんなに特別なんだろう。」これは、私がこの本の中で一番好きな言葉だ。約80キロの道のりを、朝8時から翌朝8時まで24時間かけて北高の全校生徒が歩き通すという歩行祭。一般的な修学旅行の様にどこかを観光する訳でもなく、ただ黙々と歩く。そんな行事のどこに魅力があるのか。この本を読み始めた頃の私はそう思った。しかし、ただ歩くだけのこの行事は彼らにとって間違いなく特別な時間だった。そして、この本を読み終えた私は、仲間と歩くというのがこの作品の魅力であり、歩行祭の面白さだったのではないかと思った。

例えば私が中学校に入って勉強合宿へ行ったりと、一人で勉強するよりもみんなで教室に集まって勉強した方が何倍も頑張れたという記憶がある。一緒に苦痛を分かち合うことで親近感が湧いて仲が深まったり、普段あまり話さなかった友達と仲良くなれたりする。この歩行祭ではまさに同じことが言えるだろう。約80キロ歩くという苦痛による疲れきった状態からこそクラスメイトとの親交が深まり、今まで見られなかった一面を見ることができ、何よりも歩行祭の仮眠時間は3時間だけ。それ以外は常に歩

いているのだ。例えば懐中電灯で照らさない限りは友達顔も表情も見えないまま会話をしている、そんな空間が余計に彼らの親近感を高めさせたのかもしれない。

主人公である貴子は、高校生活最後の歩行祭にある大きな賭けを抱いて臨んでいた。それは同じクラスにしながら一度も言葉を交わしたことの無い西脇融に声をかけること。彼がただのクラスメイトだったら、この賭けをわざわざ歩行祭でしなくてもいいだろう。西脇融と貴子は異母のきょうだいだった。要するに融の父の浮気相手が貴子の母であるということだ。もし私が貴子だったらそんな賭けをしようと思うだろうか。私なら絶対にそんな事はできない。相手と複雑な関係である上に、貴子は融に嫌われていると確信していた。これは小説の中の世界だが、もしこれが実際に私の前に起きていることだとすると想像もつかない。

「青春」という言葉は『夜のピクニック』の代名詞とも言えるだろう。作品の中で歩行祭について「大人と子供、日常と非日常、現実と虚構。歩行祭は、そういう境界線の上を落ちないように歩いていく行事だ。」という言葉があった。青春のど真ん中にいる彼らにとっても、何気ない話をしながら友達とタラタラ歩いたり、普段話すことのなかったクラスメイトといつもなら絶対に話さないようなことを語り合ったり、とんでもないことを実行したり、そんな全てのことを思い出の1ページに過ぎないのかもしれない。そしてこのようなことを忍ぶ「雑音」と喻えた。大人と子供の境界線にいる私達にしか聞くことのできない「雑音」は簡単にシャットアウトすることができる。しかし、タイミングを一度逃してしまおうと二度と聞くことのできない今の私達に大きな影響を与えるものだ。自分の好きなことに熱中したり、大人になつて思い返してみたらすぐくくくならぬことで悩んだり、もしかし

たら青春はこのような雑音からできているのではないか。そして、仲間という存在の大きさ、自分の学校生活についてを再確認させてくれたこの本は、私にとって間違いなく良い「雑音」になった。

書名…夜のピクニック
著者…恩田 陸